

県指定史跡甲府城跡出土の石工具について

野代 幸和

- 1 はじめに
- 2 石工具

- 3 考察とまとめ

1 はじめに

過去の発掘調査資料及び近年の調査資料の中に、石工具と考えられるものが若干存在することが確認できた。

これら石工具は石垣構築には欠かすことのできない道具であるが、破損した道具等の再利用・再加工が当然だった当時の状況から現在に伝わるものは非常に少ない状況がある。現在伝わる道具類の主なものは概ね近代以降のものであり、近世以前の石工技術は絵図や文書といった文献からしか知ることができず不明な点が多い。また、職人技術といった地味な部分も手伝ってなかなか研究が進んでいないのも現状である。

今回取り扱う資料は、再整理の際に認められたものが大部分であるが、残念なことに出土地点等については不明な部分がある。ただ、城内から出土したことは確かであり、石工技術を考えていく上では貴重な資料と考えられるためこの場を借りて資料紹介することとした。これらを詳細に観察していくとよく使い込まれたものもあり、熟練した職人による使用の痕跡が窺えるものもある。それぞれの帰属年代はばらばらであるが、甲府城が築かれた16世紀後半の石垣の矢穴幅とほぼ同一の矢や、近・現代まで使用されている豆矢などもあり、甲府城の歴史的な変遷と共に経過した石工の歴史が垣間見えてくる。本紙面を利用してこれらを紹介すると共に、若干の検討などを試みたい。

第1図に石工道具の用途と名称を示した。本稿でいう石工具とは、主に採石・加工用具であり、用途についてはこの図で理解していただけたと思う。



第1図 石工具の用途と名称

2 石工具

ここでは、発見された工具について具体的に紹介する。

発見されている道具は、採石・加工に用いるヤと加工に用いるノミおよびゲンノウである。

まず石を割るヤは復元幅9cmを測る3寸矢と復元幅12cmを測る4寸矢、幅3cmを測る一寸矢（トビヤ）、幅1.5cmを測る豆矢の4種類が、また石を割った際に押し広げるハラシヤも発見されている。第2図1は数寄屋曲輪から出土したもので刃部の中央部分のみが残存していた3寸矢である。2は数寄屋曲輪の石垣から出土したもので、ヤと推定されるが破損しているので正確な数値



甲府城の石垣補修工事で使用している道具



石工具の使用状況

は不明だが4寸矢と考えられるものである。甲府城において築城初期の石垣に残されている矢穴は4寸幅であり、続く段階のもので3寸幅のものが見られることから、安土桃山から江戸初期の段階に帰属するものと推定される。3は天守曲輪から出土した一寸幅の飛矢であり、全長5cmを測る。近代まで使用されている形態なので帰属年代は不明であるが、大正11年に建立された謝恩碑との関係を考えるのが自然と思われる資料である。4は天守曲輪から出土した豆矢で、セリ矢が一般化する以前までは幅広く使用されていたものであり全長4.5cmを測り、3と同様に謝恩碑の建造に関わる資料と考えられるものである。5は数寄屋曲輪の石垣から出土したハラシヤであり、全長11cm、刃部幅2.1cmを測る。摩耗が少なくほぼ未使用と考えられるものである。

次に採石及び加工具としてのノミについて紹介する。6が該当するが出土地点は不明である。マルノミと考えられるものでかなり使い込まれている痕跡が認められ、全長15.8cm、直径約3cmを測る。近世の所産と考えられる。7は削岩機の刃部であり、数寄屋曲輪から出土したものである。焼きが悪かったようで、使用直後に破断したようである。近代の所産である。

今年度の調査で新たに出土した資料も関連資料として紹介する。8は稲荷曲輪東面の石垣内から発見されたもので、所謂セツウに類するものであろう。柄のホゾ穴は長方形、全長13.7cm、柄穴部分の幅は6.7cm、重量は一貫目を切る2.5kgを測る。柄部が厚く、両頭部は角がとれた不整八角形で、片側頭部は発見された時点で石材に潰された状況であり、圧で変形している。しかし、頭部は潰れよく使い込まれた道具であることが観察できる。出土状況から築城期の所産と考えられるものである。文献に見られる小ゲンノウに類するものか。現在、ハリマワシとして石を打ち欠く道具は一貫目であり、それよりも小振りな点が気になる。現在の金属製カケヤに類似している。

3 考察とまとめ

城内に石切場等の存在は発掘調査の成果として把握されていたが、それらに関わる資料の存在はあまり知られていなかった状況がある。出土資料の帰属年代は幅があり、甲府城に直接係る資料かどうかの判断は難しい。

絵図や文献では形や名称、その用途については把握できるものの、具体的にどういった形状で、どんな種類のものをどのように使用したのかなど不明点が多い。他県の事例では、ヤとゲンノウの出土が丸亀城で知られており、甲府城築城期の資料と類似することから、今後比較検討を進めていければと考えている。

今回ここには紹介しなかったが、セリ板と考えられる鉄片や、密接に関わる鍛冶関係の工具類も若干認められる。近年、近代化遺産としての調査や石工技術に関する再認識の高まりによって着目されつつあり、全体的には少なくとも、これから意識しながら調査に努めれば発見される可能性があり、築城以来400年の歴史の中で秘伝とされてきた石垣普請技術の一端が明らかになっていくかもしれない。現在伝わる石工技術と対比しながら現在の石垣修復技術に応用して活かしていくためにも石工職人の実態把握のための文献調査と、現存する道具や伝承などを把握するための民俗調査を併用しながら総合的な取り組みが課題である。

参考文献

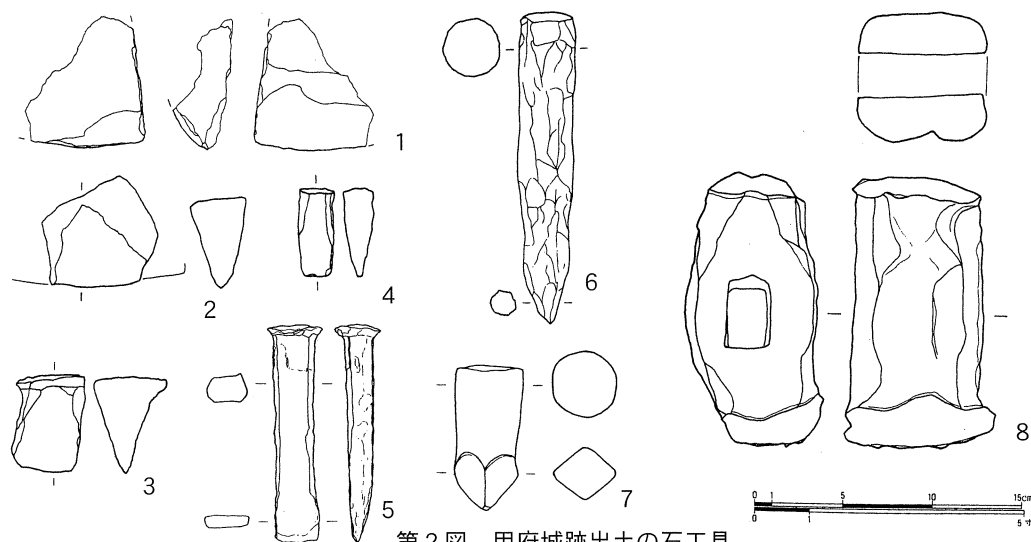
牟礼町教育委員会『牟礼・庵治の石工用具－重要民俗文化財－』

(1998)

山梨県教育委員会『「県指定史跡甲府城跡平成19年度調査・整備報告書」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第250集(2008)

山梨県教育委員会『「県指定史跡甲府城跡平成20年度調査・整備報告書」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第262集(2009)

山梨県教育委員会『「県指定史跡甲府城跡平成21年度調査・整備報告書」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第267集(2010)



第2図 甲府城跡出土の石工具